

カムチベット語燕門／斯嘎[Yanmen/Sakar] 方言 の方言特徴

鈴木博之

1 はじめに

本稿では、雲南省迪慶藏族自治州徳欽県燕門郷斯嘎村で話されるカムチベット語 Sakar 方言の音形式とチベット文語形式（以下「蔵文」）との対照を行い、また周辺の方言との対比を通して同方言の特徴を考察する。

1.1 議論の背景

迪慶州のカムチベット語は、筆者の下位分類（鈴木(2009:11)一部修正）において次のようになる。

方言区分	下位方言区分	所属方言例（迪慶州に限る）
Sems-kyi-nyila 香格里拉	rGyalthang	rGyalthang, Yangthang
	雲嶺山脈東部	Nyishe, Thoteng, Byagzhol, Qidzong
	Melung	Melung, mThachu, Zhollam
sDerong-nJol 得榮徳欽	雲嶺山脈西部	Foshan, nJol, Yungling, Yanmen, Budy
	sPomtserag	sPomtserag
	gYagrwa	gYagrwa
	Chaphreng 郷城	gTorwarong

筆者は鈴木(2008)において迪慶州の瀾滄江流域のチベット語方言について複数の地点の資料を用いて言語特徴を概観した。これらの方言は、以上の分類における「雲嶺山脈西部下位方言群」に属する。しかしながら、この下位方言群では類型的観点から見るとさらに分けることができ、その点でここに属する諸方言についてその特徴を明らかにする必要がある。鈴木(2008)では、主として蔵文 l/y 対応形式が Yanmen（燕門）方言（正確には Yanmen/sNyingthong（燕門/尼通）方言、以下「sNyingthong 方言」）およびそれ以北に分布する方言と Budy（巴迪）方言の間に異なりが見られることを明らかにしている。本稿で扱うのはこの両地点の中間に位置する村の方言であり、特に検討を要するものの1つといえる。

1.2 本稿で用いる言語資料

本稿で議論する方言資料は、特に断りのない限り、筆者自身の調査によって得たものを用いる。主として議論する Sakar 方言の調査協力者はスナン・ツモ [bSod-nams mTsho-mo] さん（女性）である。調査は 2009 年、香格里拉県建塘鎮で行った。

2 Sakar 方言の音体系概観

Sakar 方言の音体系は以下のようなものである。

【音節構造】最大で C_1GVCC 、初頭子音が鼻音のとき $CCGVCC$ もある。

注：音節末子音が 2 つ存在する場合、最後の 1 つは /ʔ/ である。

【声調】語声調で、ˉ：高平、ˊ：上昇、ˋ：下降、ˆ：上昇下降の 4 種。

【母音】各要素に対応する長母音・鼻母音が存在する。

i	u	u
e	ə ə	ɤ ɔ
ɛ	ɔ	
a	a	

【子音】子音連続に現れるものも含めた一覧

		両唇	歯茎	そり舌	硬口蓋	軟口蓋	声門
閉鎖音	無声有気	p ^h	t ^h	tʰ		k ^h	
	無気	p	t	t̥		k	ʔ
	有声	b	d	d̥		g	
破擦音	無声有気		ts ^h		tɕ ^h		
	無気		ts		tɕ		
	有声		dz		dʒ		
摩擦音	無声有気		s ^h	ʃ ^h	ɕ ^h	x ^h	
	無気		s	ʃ	ɕ, ɕ̥	x	h
	有声		z	ʒ	ʒ	ɣ	f
鼻音	有声	m	n	ɳ	ŋ	ŋ	
	無声	m̥	n̥		ŋ̥	ŋ̥	
流音	有声		l	r			
	無声		l̥				
半母音		w			j		

子音連続には主として前鼻音、前気音、わたり音を含むものがある。

3 Sakar 方言の形式と蔵文との対応関係

蔵文と口語との音対応を探る作業は、口語の発展を分析する重要な手段の 1 つである。ここでは初頭子音と母音＋末子音の 2 種に分けて、蔵文と Sakar 方言との音対応について述べ

る。声調に関する議論は行わない。また、それぞれの項目において、周辺のチベット語方言との対比について述べる。なお、チベット文字の表す音価は格桑居冕・格桑央京 (2004:379-390) を参照。

3.1 初頭子音

3.1.1 閉鎖・破擦・摩擦音の有声性

Sakar 方言では、閉鎖・破擦音および摩擦音について、蔵文で基字に先行する子音がない有声音字 *g, j, d, b, dz, zh, z* は、基本的にそれぞれの調音点の無声無気音に対応する。たとえば、以下のようなものである。

ʼpa 「めす牛」 (*ba*)

ʼsə wa 「帽子」 (*zhwa*)

ʼtōw 「熊」 (*dom*)

ʼsē 「ごはん」 (*zan*)

ただし、蔵文 *zh, z* が語中にある場合は有声音として実現される。

ʼsaw 「下」 (*zhabs*)

ʼke: zəw 「下のほう」 (? *zhabs*)

「下のほう」の例の第1音節は対応する蔵文が不明であるため、?で示している。

また、これらの文字に足字がある場合も同じく無声無気音に対応する。たとえば、以下のようなものである。

ʼca 「鶏」 (*bya*)

ʼtɕwʔ 「6」 (*drug*)

ʼtɕwō 「壁」 (*gyang*)

ʼte 「斗」 (*bre*)

以上の蔵文有声音字に先行子音（頭字、前接字）が存在するとき、Sakar 方言では有声音で現れる。たとえば、以下のようなものである。

ʰgɣ 「9」 (*dgu*)

ʰdza 「漢族」 (*rgya*)

ʰdzə wa 「蚤」 (*lji ba*)

ʰzə 「4」 (*bzhi*)

ʰdu 「石」 (*rdo*)

なお、蔵文 *dbug* 「空気」の対応形式も有聲閉鎖音が現れ、ʰbwɔʔ となる。

いずれの特徴も、周辺のチベット語方言と共通である。

3.1.2 蔵文足字 *y, r* および蔵文 *c/ch/j/sh/zh* 対応形式

次に、蔵文足字 *y, r* の対応形式を取り上げる。これは口語形式として蔵文足字 *y, r* が基字とともに音変化を起こし、その結果調音点の異なる破擦音や摩擦音が成立させていることが大半で、これらの口語形式と蔵文に基字としてもともと存在する *c, ch, j, sh, zh* などの口語対応形式とどのように合流しているかが方言差異を分析する手がかりになるからである。

蔵文 Ky 対応形式

基本的に前部硬口蓋破擦音に対応する。

$^{\text{f}}\text{dza}$ 「漢族」 (*rgya*) $^{\text{h}}\text{t}\zeta\epsilon:$ 「酸っぱい」 (*skyur po*)
 $\text{t}\zeta^{\text{h}}\text{a}?$ 「あなた」 (*khyod*)

ただし以下の対応関係を見せる語がある。

- 蔵文 *skyid po* 「幸せな」は $^{\text{h}}\text{ci: pu}$ のように前部硬口蓋摩擦音に対応する。
- 蔵文 *khyi* 「犬」は $\text{ts}^{\text{h}}\text{a}$ のように歯茎破擦音に対応する。

以上の状況は周辺のチベット語方言と共通である。

蔵文 Py 対応形式

基本的に前部硬口蓋破擦音に対応する。

$\text{t}\zeta^{\text{h}}\text{wo}?$ 「裕福な」 (*phyug*) $\text{t}\zeta\text{w}\bar{\text{o}} \text{ky}$ 「狼」 (*spyang khu*)
 $\text{t}\zeta\text{a}$ 「鶏」 (*bya*)

ただし蔵文 *sbyar* 「貼る」は $^{\text{f}}\text{dza}$ のように前部硬口蓋破擦音に対応する。

基本的に前部硬口蓋破擦音に対応するというのは周辺のチベット語方言と共通である。

蔵文 Kr 対応形式

基本的にそり舌音閉鎖音に対応する。

$\text{t}^{\text{h}}\text{a}?$ 「血」 (*khrag*) $^{\text{h}}\text{t}\text{a} \text{p}\text{y}$ 「髪」 (*skra spu*)
 $\text{t}\zeta\text{a} \text{t}\zeta\text{wo:}$ 「ナイフ」 (*gri chung*)

この状況は周辺のチベット語方言と共通である。ただし閉鎖音か破擦音かという異なりが見られる。

蔵文 Pr 対応形式

基本的にそり舌音閉鎖音に対応する。

$\text{t}\zeta\text{e}$ 「斗」 (*bre*) $^{\text{f}}\text{d}\zeta\text{a}$ 「蛇」 (*sbrul*)
 $\text{t}\zeta\text{ej}$ 「雲」 (*sprin*)

この状況は周辺のチベット語方言と共通である。ただし閉鎖音か破擦音かという異なりが見られる。

蔵文 c/ch/j 対応形式

基本的に前部硬口蓋破擦音に対応する。

ʼtɕʰɣ 「水」 (*chu*) ʼtɕa 「茶」 (*ja*)
 ʼtɕe wo / ʼtɕʰɣ pɣ 「大きい」 (*che po*) ʰtɕɣ 「10」 (*bcu*)

この状況は周辺のチベット語方言と共通であるが、Budy 方言では一部そり舌音に対応するものがある。

蔵文 sh/zh 対応形式

基本的にそり舌摩擦音に対応する。

ʃʰa 「肉」 (*sha*) ʃu: laj 「朝」 (*zhogs* ?)
 ʃʰɛj pʰö 「木」 (*shing phung*) ʰzɕ 「4」 (*bzhi*)

周辺のチベット語方言でも基本的にそり舌摩擦音に対応するが、語によっては前部硬口蓋摩擦音に対応する例もある。

まとめ

ここで扱った Sakar 方言における対応関係を整理すると、以下のようになる。

蔵文形式	代表的な対応音	蔵文形式	代表的な対応音
c/ch/j	前部硬口蓋破擦音	Kr	そり舌閉鎖音
Ky		Pr	
Py	前部硬口蓋摩擦音	sh/zh	そり舌摩擦音

その他

以上で触れなかった蔵文足字 r を含む形式に sr- がある。Sakar 方言の対応形式は、周辺の方言とほぼ同じく、以下のように基本的に足字 r の脱落と分析できる。

ʰsɛ ma 「豆」 (*sran ma*) ʰsə to 「硬い」 (*sra* ?)
 ʰsə ʰsaw 「薄い」 (*srab srab*)

3.1.3 蔵文 l/y 対応形式

Sakar 方言の周辺の方言では、蔵文 l/y 対応形式が大きく異なる。

まず、Sakar 方言の蔵文 l 対応形式は、以下のように /l/ または /l/ となる。

˧lu 「年」 (<i>lo</i>)	˧la 「神」 (<i>lha</i>)
˧pɔ̄ lɔ̄ 「牛」 (<i>ba glang</i>)	˧hɭāw 「靴」 (<i>lham</i>)
˧nɭo ma 「風」 (<i>rlung ma</i>)	˧ɔwʔ 「教える」 (<i>slob</i>)
˧nɭə wa 「月」 (<i>zla ba</i>)	

この特徴は Budy 方言と一致し、sNyingthong 方言とは一致しない。後者では蔵文 l に /j/ または /ç/ が対応する。

次に、Sakar 方言の蔵文 y (基字) 対応形式は、以下のように /j/ となる例のみが確認される。

˧ji gə 「本」 (<i>yi ge</i>)	˧nje ˧mo 「花椒」 (<i>g.yer ma</i>)
-----------------------------	-----------------------------------

蔵文 y (基字) 対応形式が /j/ のみとなる点でみると、これは Budy 方言と一致する特徴であり、sNyingthong 方言では /j/ とともに /z/ が対応する例がある点で異なる。

3.1.4 蔵文足字 w 対応形式

Sakar 方言では、蔵文足字 w 対応形式として、/wa/ という音節が現れると分析できる。その際、先行音節の母音は /ə/ となる。

˧hɭsə wa 「草」 (<i>rtswa</i>)	˧ʂə wa 「帽子」 (<i>zhwa</i>)
˧rə wa 「角 (つの)」 (<i>rwa</i>)	

しかし、˧tsʰa 「塩」 (*tshwa*) などには /wa/ が現れない。

この特徴は sNyingthong 方言と一致し、Budy 方言とは一致しない。後者では 1 音節で、かつわり音 /w/ を伴う形式が対応する。

3.2 母音および母音+末子音

基本的な対応関係は以下のように示すことができる。ただし、蔵文再添後字 s は口語形式に明確な対応関係を得られないため、以下の表では省略する。また、空白の箇所は対応形式が不明である。

V\C	# / '	b	d	g	m	n	ng	r	l	s
a	a	aw / awʔ	iʔ	aʔ	āw	ē	ō / wō	a:	i: / e:	e:
i	ə		iʔ	iʔ		ū / ēj	ī / ēj		e:	ə:
u	ɤ	ɤʔ	eʔ	wɔʔ / ɔwʔ	ō	ē	ō / wō	ə:	ɤ:	e:
e	i / e		eʔ		āw	ē	ī	a: / e:	ɤ:	e
o	u	ɔwʔ	e / əʔ	oʔ	ōw	ū	ō	ə:		e: / ɤ:

Sakar 方言では、必ずしも蔵文との対応関係は一対一になるとは限らず、上に示したのは1つの傾向である。

特に注目できるのは、蔵文 u# に /ɣ/ が対応する一方で蔵文 o# に /u/ が対応する点や、蔵文後置字（末子音）が両唇音の場合、口語形式でも /w/ を末子音として残存させる点などをあげることができる。これらは周辺の方言で多く見受けられる特徴ではない。

4 Sakar 方言の語彙形式の特徴

4.1 古蔵文に対応する口語形式

迪慶州のチベット語の中には古蔵文に対応する口語形式をもつものがあることが知られているが、以下にその言及に当てはまる例を掲げる。

語義	Sakar 方言	蔵文	古蔵文
目	^h ɲi: ts ^h ə	<i>mig</i>	<i>dmyig</i>
火	^h ɲi	<i>me</i>	<i>smye</i>
名前	^h ɲɔ	<i>ming</i>	<i>mying</i>
～でない	^h ɲi	<i>mi</i>	<i>myi</i>
ない	^h ɲeʔ	<i>med</i>	<i>myed</i>

以上に掲げた語形式は、いずれの方言においても古蔵文との関連が見出される。

4.2 音節の縮約

蔵文で2音節で構成される語が、口語形式で1音節に縮約する形式が現れる。

^htʂa: 「雨」 (*char pa*)

^hwā: 「乳」 (*'o ma*)

^hmū: 「霧」 (*smug pa*)

口語形式は声調が上昇調で長母音を伴うことに特徴づけられる。このような例は、蔵文の第2音節が *pa*、*ma* などの音節であるものが多い。縮約するかどうかは語によって決まっており、条件に合う蔵文形式をもつもの全てが1音節に縮約するのではない。

この種の縮約は周辺の方言でも少なからず見られるが、方言によってどの語が縮約するかすべて異なっている。

4.3 方言語彙

ここでは、Sakar 方言において蔵文と対応関係をまったく持たない、または完全な対応関係を得られない特徴的な語彙形式のいくつかを取り上げ、その形式について周辺の方言との相違点を個別に検討する。ただし名詞・数詞・代名詞に限る。以下の項目の多くは Suzuki

(2009)でも取り上げられているため、見出しの後ろに同論文の語彙に与えられている通し番号を()に入れて添える。

- ʔjaw 「光」(4) : 蔵文 'od
Sakar 方言に独自の形式で、蔵文および周辺の方言に類似の形式は認められない。
- ʔza 「虹」(6) : 蔵文 'ja'
「虹」が有声そり舌摩擦音を含んだ形式で現れるのは、周辺では nJol (升平) 方言があるほか、Sems-kyi-nyila 方言群のいくつかの方言とも共通する。ただし、Sakar 方言の近隣に分布する方言では、そり舌摩擦音のかわりに歯茎摩擦音で現れる。
- ʔdū za 「橋」(17) : 蔵文 zam pa
Sakar 方言の形式に対応する蔵文形式は不明であるが、酷似する音形式をもつ方言は sNyingthong 方言およびそれ以南に分布する方言に見られる。一方、sNyingthong 方言以北に分布する方言や Sems-kyi-nyila 方言群に属する多くの方言では、蔵文対応形式と若干異なっており、初頭子音が有声歯茎破擦音となる形式を用いる。
- ʔra ro 「子供」(28) : 蔵文 phru gu
Sakar 方言の形式に対応する蔵文形式は不明であるが、周辺の方言も Sakar 方言に酷似する形態をもつ。
- ʔhje: lje 「子ぶた」(53) : 蔵文 phag phrug
方言形式が多様になる語の 1 つである。周辺の方言もまた Sakar 方言の音形式と酷似するものをもつ。
- ʔko ro / ʔt̪ɕö 「ロバ」(57) : 蔵文 bong bu
Sakar 方言の形式に対応する蔵文形式は不明であるが、周辺の方言も Sakar 方言に酷似する形態をもつ。Budy/Jieyi (結義) 方言の ʔhko rwo/ は「ロバ」の意で用いられるが、形態的には Sakar 方言の「ロバ」と同一の来源であろう。
- ʔna mje 「猫」(58) : 蔵文 byi la
方言形式が多様になる語の 1 つである。Sakar 方言の形式に対応する蔵文形式は不明であるが、酷似する形式をもつ方言は sNyingthong 方言およびそれ以南に分布する方言に見られる。sNyingthong 方言以北に分布する方言では /l/ を含む形式が用いられる。
- ʔh̥laʔ 「はやぶさ」(62) : 蔵文 glag
蔵文 glag と関連が見込まれるが、初頭子音が無声になる点が特徴的である。蔵文 l がかわるため、これが /j/ に対応する方言では、たとえば Yungling 方言 ʔçaʔ のように、/ç/ で実現されるものと形式上対応するといえる。

- *ˈna mba* 「葉」(70) : 藏文 *lo ma*
方言形式が多様になる語の1つである。周辺の方言を見ると、sNyingthong 方言で *lʷlu* という形式が用いられる以外、Sakar 方言と近い音形式を見せている。
- *ˈka ra* 「青稞」(73) : 藏文 *nas*
周辺の方言もまた Sakar 方言の音形式と酷似するものをもつが、その来歴に関しては不明である。
- *ˈpə ku* 「唐辛子」(78) : 藏文 *si pan*
周辺の方言を見ると、sNyingthong 方言で *ˈtʃu gu* という形式が用いられる以外、Sakar 方言と近い音形式を見せている。初頭子音の両唇閉鎖音が有声か無声かという異りがある。
- *ˈtʃe ma* 「米」(-) : 藏文 *bras*
周辺の方言を見ると、Sakar 方言に近似の形式を用いる方言は見られない。ただし Sems-kyi-nyila 方言群に属するいくつかの方言では、Sakar 方言に共通の形式が用いられる。
- *ˈbə la* 「服」(83) : 藏文 *gos zan*
Sakar 方言の形式に対応する藏文形式は不明であるが、酷似する音形式をもつ方言は Budy/Jieyi 方言など Sakar 方言の分布地域以南で話される方言に見られる。
- *ˈmə* 「2」(98) : 藏文 *gnyis*
「2」が両唇音を含む形式で現れるのは、周辺の方言では sNyingthong 方言に見られる。この地域以外にも Melung 下位方言群に属する数地点の方言で「2」が両唇音で現れるため、必ずしも鈴木(2008)で指摘した怒蘇語の *m⁵⁵* 「2」と直接関連するとは言いきれない。
なお、「12」に含まれる形態素「2」だけが両唇音で現れる方言に Budy/Jieyi 方言があり、Sakar 方言の周辺域全体の方言で両唇音が確認できることになる。
- *ˈkwə* 「誰」(47) : 藏文 *gang / su*
「誰」に相当する藏文形式は主に *gang / su* の2種があり、Sakar 方言の場合前者に対応する。ただし音節末鼻音に相当する要素が口語形式には現れていない。語彙形式を考えると、sNyingthong 方言およびそれ以南に分布する方言は藏文 *gang* 対応形式を用い、いくつかの地点の口語形式でも音節末鼻音に相当する要素が現れていない。sNyingthong 方言以北に分布する方言では藏文 *su* 対応形式を用いる。

以上、限られた語数ではあるが、それらを概観すると、Sakar 方言を含む燕門郷の方言及びそれ以南に分布する方言の間で共通する形式が複数指摘できる。これは、語彙の特徴について燕門郷と雲嶺郷の間に引かれる等語線が多くなることを意味する。音声方面の特徴が燕門郷内で分かれるという点と異なりを見せている。

5 まとめ

本稿では、Sakar 方言の方言特徴を蔵文を基準に分析するとともに、その各種特徴について、雲嶺山脈西部下位方言群の瀾滄江流域で話されるチベット語方言と対照し、相違点を考察した。Sakar 方言の話される地域は燕門郷内にあるが、音対応の面では南接する巴迪郷で話される方言に近く、語彙方面では燕門郷と巴迪郷に分布する方言と共有する方言形式をもつということが分かった。音対応を見れば、これまで sNyingthong 方言と Budy 方言がいわゆる等語線で分かれうると考えられていたが、それが燕門郷において前者と Sakar 方言の間で分かれることになり、これが方言分布についてさらに詳細に判明したことである。

参考文献

格桑居冕 [sKal-bzang 'Gyur-med]・格桑央京 [sKal-bzang dByangs-can] (2004) 《實用藏文文法教程 [修訂本]》四川民族出版社

鈴木博之 (2008) 「迪慶州瀾滄江流域カムチベット語（徳欽/雲嶺/燕門/巴迪方言）の方言特徴」『ニダバ』第 37 号 115-124

—— (2009) 「迪慶州カムチベット語の方言比較——方言の下位区分をめぐって——」長野泰彦編『チベット文化圏における言語基層の解明——チベット・ビルマ系未記述言語の調査とシャンシュン語の解読 (No. 16102001) 研究成果報告書』Vol.3, 1-13

Suzuki, Hiroyuki (2009) Origin of non-Tibetan words in Tibetan dialects of the Ethnic Corridor in West Sichuan, in : Yasuhiko Nagano (ed.) *Issues in Tibeto-Burman Historical Linguistics*, 71-96, National Museum of Ethnology

[付記]

筆者による現地調査については、平成 19-21 年度科学研究費補助金特別研究員奨励費の援助を受けている。